アメリカ高等教育におけるルーブリックをもちいた評価

Evaluation Using Rubrics in American Higher Education

塚原 修一*
Shuichi TSUKAHARA

抄　録

ルーブリックをもちいた評価の好事例について，留学など教育目標が抽象的に設定されやすい領域，学習成果の評価が教育改善に結びついている事例などを対象に，アメリカへの訪問調査を実施した。本稿では大学３件と機関研究の支援組織２件について論じた。ルーブリックの利用は大学内部の評価をより妥当なものとするが，大学コンソーシアムにおけるルーブリックの利用は，個別大学をこえて評価の信頼性を確保するとともに，大学の多様性にも対応していた。留学の評価について，留学から期待される成果を学生にあらかじめ考えさせ，帰国後に省察的学習をうながすことは多くの大学で行われていたが，留学の成果を帰国後の学習にいかに結びつけるかを，留学にさきだって学生に計画させている大学もあった。ルーブリックを活用した評価は，学生調査の実施やデータ分析をしばしばともなう。アメリカにはそれらを支援する組織があり，機関研究の水準を高めていた。

Ⅰ　はじめに

１．ルーブリックをもちいた評価

ルーブリック（Rubric）の語は，「絶対評価の判断基準表」を意味する教育用語として，1980年代にアメリカで使われはじめた（田中 2004）。高等教育分野では，スペリングス報告（Commission on the Future of Higher Education 2006）によって学習成果の客観的測定法の開発がはじまった。その成果のひとつとして，全米カレッジ大学協会（AAC&U）のVALUE（Valid Assessment Learning in Undergraduate Education）ルーブリックが2007年に作成された。これは，知的・実践スキル，個人的・社会的責任感，学習の統合という３領域に関する15種類の汎用的なルーブリックで，学士課程教育を対象とする（吉田 2013）。

日本においては，初等中等教育分野では「学習指導要領に示す目標に照らしてその実現状況を評価すること」（文部科学省初等中等教育局長 2001），すなわち絶対評価への転換によって注目され，高等教育分野では学士力の提唱（中央教育審議会 2008）が契機となった。

＊関西国際大学客員教授 教育総合研究所客員研究員

国立国会図書館における和文献の検索によれば，ルーブリックを検索語として236件が抽出され，初出は2002年であった。ルーブリックと大学を検索語とすれば43件が抽出され，初出は2003年であった[1)]。これらの先行研究には，さまざまな単元や授業科目などを対象として，ルーブリックの作成や評価の試行などを行ったものが多いように見受けられる。そのためか，初等中等教育分野では，より一般的なルーブリックの必要性が指摘された（安藤 2008）。一方，高等教育分野では，ルーブリックを活用した評価には心理測定学にもとづく標準テストほどの厳密性は期待できないが，より高次の（あるいは統合的な）能力を形成的に評価できる可能性があるという（松下 2012，松下ほか 2013）。代表的な入門書も翻訳されて（スティーブンス・レビ 2014），今後の進展が予想される。

２．アメリカ調査

一般論として，教育目標が明解で具体的であるほど，ルーブリックの作成と活用は容易であると考えられる。この視点から学習指導要領と学士力を対比すれば，前者は詳細にわたって具体的であり，後者は概括的で抽象的である。すなわち，高等教育においては，教育目標を具体化する努力がもとめられるとともに，松下らが指摘したように，初等中等教育よりも高次の水準でルーブリックが作成・活用される傾向がある。

また，教授した内容を学生が修得することは，いうまでもなく重要である。相対評価では，それとはひとまず切りはなされた形で評価がなされるが，絶対評価では修得の程度そのものが評価の対象となる。そのため，ルーブリックの導入は，学習をめぐる学生の実態調査や，修得の程度を高めるための教育改善，さらには教授・学習・評価過程の周到な（再）設計など，より広い機関研究（Institutional Research, IR）をともなうと考えられる。

このような問題意識にもとづき，以下の点に配慮して，ルーブリックを活用した評価の好事例についてアメリカへの訪問調査を実施した[2)]。第１に，教育目標が抽象的に設定されやすい領域に注目して，留学などの評価事例をとりあげた。第２に，機関研究の枠組みのなかで，学習成果の評価が教育改善に結びついている事例を探索した。第３に，日本と同じくアメリカの大学には多様性がみられるが，絶対評価と多様性をいかに関係づけているかに留意した。本稿では，そのなかから特色のある事例について論じる。

Ⅱ　文章作成の評価――カールトン大学

１．学生学習目標

カールトン大学（Carleton College）は，1866年に創立されたミネソタ州の学士課程教育が中心の大学で，学生数は約2,000人である。アメリカ国内のランキングは良好である。４年後の卒業率はおおむね90％で，10％は休学している。この大学は評価に力を入れていて，つねに教育の改善を実施している。予想目標（Expected Outcomes）をまず設定して達成状況を評価し，必要ならば目標を変更する方式がとられている。現在の学生学習目標（Student

Learning Outcomes）は次の６つである（Carleton College Dean of the College Office 2010）。

1) 世界の人々，芸術，環境，文学，科学，制度について継続的に学び続けるため必要な知識を獲得したこと，すなわち学び方を学んだことを示すことができる。

2) 各自の学習領域についての充分な知識と，その領域における探求の方式と方法論に関する知識を示すことができる。

3) 証拠を分析すること，すなわち次のことができる。その前提として仮定された理論の特徴，方法論，論争点などを正しく理解すること。それらとは異なる視点や仮定を示すこと。質的量的なさまざまな主張を識別することなど。

4) 問題を定式化して解決すること，すなわち以下のことができる。情報を位置づけ，分析し，総合して，評価すること。傾向，相互関係，重要性を区別すること。状況や現象の探索，あるいは，仮説や結論に到達するための課題・問題の設定によって，熟慮した結論ないし解決にいたることなど。

5) 意思疎通と議論が効果的にできる。

6) 各自の学習領域において，専門分野ないし学際領域の研究を遂行すること，かつ／または，芸術的な創造・創作活動などの自立的作業を実施することができる。

２．文章作成の評価

この大学では，10年前から文章作成ポートフォリオを実施している。文章作成は１年次の必修科目である。２年次に，学生は各自のポートフォリオに収録した文章のなかから，３つ以上の学科・プログラムにわたる３～５件の文章を選択して，これをルーブリック（表１）による評価の対象とする。１学年の学生500人分を，さまざまな専門分野の35名の教員が評価する。評価は６月の３日間にわたって行われ，はじめに，文章評価の経験がない教

表1　カールトン大学の文章作成ルーブリック

規　準	全体として不充分	全体として，おおむね良好	全体として良好
読者／目的	文章の読者や目的への配慮が，あまり／まったく示されていない	文章の読者や目的が，おおむね示されている	文章の読者や目的に，表現の方略がよく適合している
主張（該当するものについて）	主張の記述が不充分で，かつ／または，論証が不足している	主張は明確であるが，部分的な論証にとどまっている	主張の展開が論理的で，論証され，首尾一貫している
明解さ	記述に混乱があったり，明解ではない傾向がある	記述が明解で，論旨を追うことができる	記述が明解，簡潔で，説得力がある
文章の構成	文章に明確な構成が欠けている	文章に明確な構成がある	形式と内容を組み合わせた文章の構成が，読者の賛同をうながすものとなっている
表現の誤り，たとえば，文法，構文，綴り，語法，句読法などの規則違反	文章に規則違反が多くあって読みにくい	文章は全般的に読みやすいが，規則違反がときどきある	文章に規則違反がない

出典　Carleton College（2015c）より翻訳。

員を対象に，前年度に提出された文章を題材として評価の練習がなされる。評価は教員２名で行い，評価が大きく割れたときには３人目の教員が評価にくわわる。問題のある学生には文章作成を担当する教員が個人指導を行う（Carton College 2015a, 2015b, 2015c）。大きな問題のひとつは，書きたい内容はあるが，それを表現できない学生がいることである。評価の結果は教員が自由に使うことができる。とくに，学生の文章作成力が特定されることで，他の科目の評価の改善につながった。この評価の成果として，学生の文章作成力が向上したほか，教員の意識が高まった。文章作成ポートフォリオの総括的評価を５年ごとに実施している。

Ⅲ　留学の評価――ワバッシュ大学

１．学生個人データの分析

ワバッシュ大学（Wabash College）は，1832年に創立された自由学芸分野の大学である。学生数900人の男子校でインディアナ州にある。この大学の機関研究は研究センター（Center of Inquiry）という部署で行われ，教育だけでなく財務分析も担当している。この大学の特徴にワバッシュ全国調査（Wabash National Study）がある。当初の目的は，小規模カレッジが学生によりよい影響を与えることを実証することにあり，NSSE（The National Survey of Student Engagement，全国学生活動調査）に質問をいくらか追加して実施した[3)]。組織間比較にとどまらず，教育改善のためには学生個人によるちがいに注目する必要があり，当初から学生個人データの共有を行った。

多くの大学が評価に費用をかけているが，それに見あう改善はなされていない。学生の満足度では把握できないものとしてルーブリックに注目し，本学には学生の文章を評価する共通のルーブリックがある（Wabash College Center of Inquiry 2009）。卒業論文のように大がかりな科目は，要素（基礎知識，研究手法，文章力など）に分解して改善する。本学の教員の多くは数量的データが苦手なので，それにかわるものといえる。成績が不振な事例では学生と討議する。なぜ，その学習を行うのかが，学生に知らされていないことが多い。また，学習の全体像が見えていないため，なぜそういう点数になるのかがわかっていない。このような場合，自校のなかで改革することは難しく，外部者の助言をあおぐ方がよい。ルーブリックは，教員の研修や教員の比較にも使用している。共通のｅポートフォリオもあり，その作成は教育部局にゆだねている。評価部局としては，そこに含まれる情報が多すぎるので，学生を抽出して利用している。

２．留学の評価

影響が大きい教育方式（High-Impact Educational Practices, Kuh 2008）のなかで，留学は教員が経過を管理しにくい。留学を体験する前に，体験の枠組み（Frame of Experience）の作成を学生に要求することが望ましい。留学がどのように本人の学習経験を変えると思うか，

留学による教育課程や組織の任務への貢献は何かなどをあらかじめたずね，留学によってそれを確認するのである。たとえば，ベロイト大学（Beloit College）の留学申請を評価するルーブリックの項目は次のようである。1)目標（３～５つ）と希望するプログラム／大学，2)これまで，および帰国後の学習との関連，3)留学への準備状況，4)直面しそうな非学術的な課題とそれへの対処（Beloit College 2015）。

留学プログラムには，体験旅行（Immersion Trip）と学期にわたる留学がある。前者は教育コースに埋め込まれた海外体験で，たとえばローマ美術や考古学を学ぶ一環として現地におもむくことである。通常は10日ほどで，毎年，12～15人の学生からなる10団体ほどを教員が引率して休業時に実施する。学生には，20分の口頭発表２回と調査研究報告書の提出をもとめる。事前の発表では，このプログラムを選択することでどのような変容が自分に起こるか，どのような便益があるかを考えさせる。事後の発表では，異文化・海外での意思疎通に自信がついたか，何が自身を成長させたか，障害は何であったかなどの質問をする。体験旅行の利点は，1)帰国後に大学が国際化する，2)短期なので他の活動への影響が少ない，3)教員とともに行動することでその後の授業にも役立つことである。州内から本学に進学した学生には，州の外に出たことがない者もいる。体験旅行は広い世界を知る契機となり，多様な体験が学生の変容につながると考えている。

後者（学期にわたる留学）は毎年30～40人ほどである。外国語や外国文化を学ぶ学生が当該国に滞在するプログラムがその典型である。そのほか，科学を学ぶ学生がアメリカ国内の研究機関に滞在したり，音楽や舞踊を学ぶ学生がニューヨークで学外プログラムを体験する事例などがある。合否の評価により３ないし４単位を認定する。留学プログラムの良否は経験からわかる。よい教員が実施していること，本学と同等の水準であることが重要である。留学に応募する学生は50～60人であり，応募には教授２人の推薦を要する。１年次の履修歴，成績，分野間の均衡などをみて，学科長，学生支援担当者，留学担当者の協議により選抜する。受入先の教員とよく相談することが重要であり，そうでない時間と金の無駄になる。学生には，留学中と留学後を含めた卒業までの学習計画を作成させる。学生に作業をさせて，留学を勝ちとらせることが重要である。

留学に対する評価は，アメリカでは数年前からはじまった。通常は，合否の評価だけがなされている。留学の効果は思ったほどではなく，洗練された分析による注意深い評価測定が必要と思う。留学中の形成的な評価は，担当教員が各学生から情報を収集して行う。経験の質を問うことが目的であるが，学生の満足度によって測定されることが多い。

Ⅳ　大規模大学における留学の評価――ジョージア大学

１．評価体制

ジョージア大学（The University of Georgia）は1785年に創立されたジョージア州の州立大学で，17学部からなり，学生数は35,000人である。この大学では，学習計画室（Office of

Academic Planning）が評価を担当している。機関研究の担当者は18名であり，戦略計画，学習成果評価，７年ごとの教育課程評価。大学レベルの学習成果評価に責任をもち，教育課程レベルの学習成果評価については調整と支援を行う。大学レベルの評価尺度としては，CLA（Collegiate Learning Assessment，外部団体が実施する標準テストのひとつ）を１年生と４年生が受験する。１年生はSAT（Scholastic Assessment Test，大学入試の全国共通試験）の成績分布をみて100名を選択し，４年生は受験者を指名するが，結果は安定的である。そのほかに，前述のNSSEを含む複数の標準テストを実施している。

２．国際プログラム

国際プログラムの数は107で，毎年2,000人以上の学生が留学し，卒業までに学生の33％が留学を経験する。なお，留学生の受入数は2,500人である。この大学の国際プログラムは1930年代にはじまり，90年以降に急成長した。かつては各学部が担当していたが，安全性や法律面などの理由から国際教育室（Office of International Education）に統合した。国際教育室は留学生の送り出しに忙しく，評価や分析はあまり行っていない。

留学の希望者は，「世界の言語と文化，人文，学芸」（一般教育のコアカリキュラムを構成する５領域のひとつ）と「環境設計」（学部のひとつ）を学ぶものに多い。前者では，留学プログラムをきわめて望ましい構成要素と位置づけている。１月に申し込み，春に事前ワークショップ，夏に留学，秋に事後ワークショップという日程が一般的である。留学プログラムの評価は，授業科目に対応した留学については当該科目の担当教員が行うが，アカデミックな評価（たとえば外国語能力の向上）となることが多い。カリキュラム外の留学は学生課が担当するが，そこでは留学のプログラムとしての成果が求められる。

３．留学の効果

留学の効果に関する研究もすすめている。同一の教育コースを同じ教員が担当して，留学する場合としない場合とを対比している。地球的観点調査（Global Perspective Inventory）を成果の指標としているが[4)]，その尺度は，認知・内面・対人に区分される。秋学期に留学する場合には，３月に事前テスト，９～11月に留学，12月に事後テストという日程となる。300人の学生を対象とする予備的分析の結果によれば，留学による統計的に有意な効果がみられた。文化的相対主義にむけた学生の成熟と，プログラムで得られた知識を統合して全体像を画くような方向づけが期待される。GPA（Grade Point Average，成績の平均点）が高い学生とマージナルな学生に効果が大きく，４年卒業率が17％上昇した。

Ⅴ　機関研究の支援組織――HEDSとAIR

HEDS（Higher Education Data Sharing Consortium，高等教育データ共有コンソーシアム）は，私立大学における，機関研究，意思決定支援，評価測定，自由学芸教育の促進を支援

する非営利組織であり，ワバッシュ大学内に事務局をおく。発足は1983年で，調査時（2013年）の会員は120校である。事業内容は，情報共有，会員校の共同事業の仲介，年次大会の開催，調査の実施（大学調査，１年生を対象とした調べ学習経験調査，４年生調査，卒業生調査）である。調査は契約した調査会社がオンラインで実施する。情報共有によって大学間比較が可能となる。その対象は，大学情報，HEDSが実施する調査の結果と，外部で実施される調査（NSSE，CIRP，HERI）の結果である。公正の原則にもとづき，自大学が提供したデータについて他大学からデータの提供を受ける。

この種のコンソーシアムは他にもあるが，高額でなく良質な調査結果を提供している（年会費3,000ドル，学生調査の基本料金500ドル）。社会調査や統計分析の基盤が学内にない大学にとって，データへの教員の抵抗感を抑制するものとなろう。学生調査の結果をふまえて大学に助言するさいは，調査票を示して学生と面談し，なぜそのように回答したかをたずねることが重要である。回答は同じでも，それにいたる背後のメカニズムは大学の文化によって異なる。学生調査の結果をいかに活用したかを学生に示すことも重要である。

AIR（The Association for Institutional Research，機関研究協会）は教育を主な活動とする非営利組織で，1965年に設立された。今日では，機関研究，評価測定など，高等教育の意思決定にデータを活用する人々の世界最大の団体であり，学会と同業者団体の性格をあわせもつ。事業内容として，年次大会（フォーラム）の開催は日本でも知られているが，そのほかに，オンラインによる機関研究等の学習プログラムの提供（データと意思決定アカデミー，IPEDS訓練コース[5]），研究費の提供（国立科学財団と国立教育統計センターが提供する全米データセットを使用する研究が対象），受託研究の実施などが行われている。

Ⅵ　事例のまとめ

(1) ルーブリックを活用した評価とは，明確な証拠をふまえた絶対評価の一形態である。心理測定学にもとづく標準テストや学生調査が併用されることもあり，より高次ないし統合的な評価がめざされていた。評価の対象は文書（や口頭発表など）の形をとることが多いが，学生の文書作成力と記述したい内容を区別することの重要性が指摘された。

(2) ルーブリックを活用した評価の信頼性を確保するために，複数の教員がそれぞれ独立に評価を行い，結果を対比して整合性が確認されていた。それだけでなく，個別大学をこえた評価の信頼性を確保する場として大学コンソーシアムが機能していた。コンソーシアムは志を同じくする大学の組織体であり，そうした大学集団を参照基準とすることで，大学の多様性にも対応していた。

(3) 今回の事例とした大学では，評価だけでなく，学生の学習に対する指導・支援も充実していた。とくに，ポートフォリオによって学生を個人単位で追跡している事例がみられた。評価との関連でいえば，学生調査の結果を統計的に分析するにとどまらず，回収した調査票を手元において回答した学生と面談し，（たとえば何かに不満であるといった）回

答にいたった理由をたずねて理解を深めることがなされていた。

(4) 留学の評価について，いくつかの大学では周到な準備がなされていた。留学から期待される成果を学生にあらかじめ考えさせ，帰国後に省察的学習をうながすことは多くの大学で行われていた。さらに，留学の成果を帰国後の学習にいかに結びつけるかを，留学にさきだって学生に計画させている大学もあった。

(5) 留学の効果についての研究もなされていた。かつての留学は外国語の知識・技能の修得など目的が単一であったが，1990年代以降は，それにくわえて，国際性の涵養，異文化理解など目的が複合化し，留学の効果に関する研究も深化した（Ogden 2015）。ジョージア大学における予備的な分析の結果によれば，同じ内容を国内で教育するよりも，留学した方が学習成果は統計的に有意に高まるというが，この結果は先行研究（Engberg 2013, Engberg et al. 2015）とも整合的である。留学の目的の複合化は日本も例外ではなく，成果の評価における課題は日米に共通している。

(6) ルーブリックを活用した評価は，学生調査の実施やデータ分析をしばしばともなう。アメリカにはそれを支援する組織があり，調査や統計分析の教育機会や，調査・分析サービスを提供していた。とりわけ大学コンソーシアムは，志を同じくする大学の連携体として組織されているため，そこでの大学間比較は，大学教育の質保証を担保するとともに，個別大学の多様性に留意した改革を推進する良質な機関研究となっているようにみえる。

Ⅶ　日本への示唆

これまでの記述から，日本への示唆をまとめれば以下のようになる。

(1) ルーブリックは絶対評価の判断基準表であり，これを作成するためには，教育目標をいくつかの構成要素（規準）に分割して，それぞれについて到達するべき水準（基準）を明示する必要がある。ルーブリックは教育目標を周知させるために学生に示されることが多く，ウェブ等に公開されているものも少なくない。それらを参照して「判断基準表」を作成することは，それほど困難ではないように思われる。

(2) その一方で，ルーブリックの活用には負担をともなう。そもそもルーブリックが注目さるのは，教育目標やその構成要素が抽象的で，（標準）テストのような手段では到達度が測定しにくいからである。ルーブリックには到達度の判断基準が示される。表１はかなり単純な例であるが，それでも，その文言だけで疑問の余地のない評定が常にくだせるとは言いがたいのではないか。すなわち，判断基準の運用を詳細に具体化して，評価の結果が適切で一貫したものとなることがもとめられる。とりわけ，複数の教員が評価に関与する場合には，模擬答案などを用いた評価の練習を事前に行うとともに，評価の作業を集中的に実施して，評価結果の統一性ないし一貫性を確保する必要があろう。

(3) 本稿が注目した留学の評価については，留学目的の複合化にともなってアメリカでも評価のあり方が模索されているようにみえる。いずれにせよ，的確な評価をくだすため

には，学生，教員，大学がさまざまな事前準備を行う必要があり，それがかなりの負担をともなっていた。日本では大学の国際化やグローバル人材の育成が叫ばれているが，教室外学習をその手段とする場合には，準備と評価には負担をともなうことになろう。

(4) ルーブリックをもちいた評価によって学習成果を可視化するときには，評価データをどのような大学と比較して自らの特徴や改善すべき点を明らかにするかが重要である。そのさい，学生調査やデータ分析を実施すれば理解を深めることができる。このときに，大規模大学であれば学内の専門家から助言を受けることができようが，小規模大学では学内に適当な人物が見あたらず，かといって学外の専門家に相談することもはばかられるという事態になりかねない。前述のように，アメリカにはそうした活動を支援する大学コンソーシアムが存在するが，日本にもそうした機能の充実がまたれる。とりわけ，学生個人データの分析にはそれが必要であろう。

【注】

1) 本文中の検索結果は2016年３月４日のものである。2014年３月の検索結果はルーブリックが141件，ルーブリックと大学が18件であったから（『日本高等教育学会第17回大会発表要旨集録』2014年，114頁），この２年間に和文献が急増している。
2) アメリカへの訪問調査は，科研費（課題番号25285240）による研究の一環として2013年10月に実施した。
3) NSSEはインディアナ大学が1998年に開始した全国的な学生調査である。
4) 地球的観点調査（Global Perspective Inventory, GPI）はアイオワ州立大学で開発されたテストであり，そのサイトには留学の効果をGPIによって測定した研究成果として，Engberg (2013)，Engberg et al. (2015)などが掲載されている。
5) IPEDSはThe Integrated Postsecondary Education Data System（アメリカの高等教育機関の包括的なデータベース）の略称で，その利用法を学ぶコースである。

【文　　献】

安藤輝次「一般的ルーブリックの必要性」,『教育実践総合センター研究紀要』奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター，17，1-10，2008

中央教育審議会『学士課程教育の構築に向けて（答申）』2008

松下佳代「パフォーマンス評価による学習の質の評価―学習評価の構図の分析にもとづいて」,『京都大学高等教育研究』18，75-114，2012

松下佳代，小野和宏，高橋雄介「レポート評価におけるルーブリックの開発とその信頼性の検討」,『大学教育学会誌』35(1)，107-125，2013

文部科学省初等中等教育局長「小学校児童指導要録，中学校生徒指導要録，高等学校生徒指導要録，中等教育学校生徒指導要録並びに盲学校，聾学校及び養護学校の小学部児童

指導要録，中学部生徒指導要録及び高等部生徒指導要録の改善等について（通知）」2001
スティーブンス，D.，レビ，A. J.（佐藤浩章監訳，井上敏憲，俣野秀典訳）『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部，2014（Stevens, D. and Levi, A. J. *Introduction to Rubrics: An Assessment Tool to Save Grading Time, Convey Effective Feedback, and Promote Student Learning*, Stylus Publishing, 2013）
田中博之「新しい評価Q&A」，『CS研レポート』啓林館教科教育研究所，51，36-41，2004
吉田武大「ルーブリック―定義，作成方法，バリュールーブリック」，濱名篤ほか（編）『大学改革を成功に導くキーワード30―「大学冬の時代」を生き抜くために』学事出版，187-192，2013
Beloit College “Study Abroad Application Essay Prompts and Rubric” 2015, https://www.beloit.edu/oie/assets/updated_prompts_and_rubrics.pdf
Carleton College “The Writing Program, Requirements” 2015a, https://apps.carleton.edu/campus/writingprogram/carletonwritingprogram/portfolio_requirements_2014/
Carleton College “The Writing Program, The Scoring Process” 2015b, https://apps.carleton.edu/campus/writingprogram/carletonwritingprogram/scoring/
Carleton College “Carleton College Writing Portfolio Scoring Sheet” 2015c, https://apps.carleton.edu/campus/writingprogram/assets/Portfolio_Scoring_Sheet_2.pdf
Carleton College Dean of the College Office “Carleton College Student Learning Outcomes” 2010, https://apps.carleton.edu/campus/doc/faculty-resources/assessment/Learning_Outcomes/
Commission on the Future of Higher Education *A Test of Leadership: Charting the Future of U.S. Higher Education*, 2006, http://www2.ed.gov/about/bdscomm/list/hiedfuture/reports/final-report.pdf
Engberg, M. E. “The Influence of Study Away Experiences on Global Perspective-Taking” *Journal of College Student Development*, 54(5), 466-480, 2013
Engberg, M. E., Jourian, T. J. and Davidson, L. M. “The Mediating Role of Intercultural Wonderment: Connecting programmatic components to global outcomes in study abroad” *Higher Education*, DOI 10.1007/s10734-015-9886-6, 2015
Kuh, G. D. *High-Impact Educational Practices: What They Are, Who Has Access to Them, and Why They Matter*, Association of American Colleges & Universities, 2008
Ogden, A. C. *Toward a Research Agenda for U.S. Education Abroad*, AIEA Research Agendas for the Internationalization of Higher Education, 2015, http://www.aieaworld.org/assets/doc/research_agenda/ogden_2015.pdf
Wabash College Center of Inquiry “Advice for Evaluating Student Work Using Rubrics” 2009, http://static1.1.sqspcdn.com/static/f/333946/8590926/1284746754540/Collecting-student-work-for-assessment.pdf?token=bu%2FjvOT6x%2FUr7rcjtQ1PIlLYJIc%3D

Abstract

To explore the good practices of evaluation utilizing rubrics in higher education, a site visit to the United States was carried out. Examples were chosen mainly from the domain where educational goals were often set abstractly, such as study abroad, and/or the institutions that the outcomes assessment were tied to the educational improvement, in the wider framework of institutional research. Cases of student writing in Carleton College, study abroad in small Wabash College, study abroad in large-scale University of Georgia, and two support organizations of institutional research were discussed. The assessment in the universities became more appropriate by using rubrics. In addition, using rubrics in the university consortium enhanced the reliability of assessment across the individual university, and also accepted the diversity of universities. As for the outcomes assessment of study abroad, in many universities, a student must report prospective results before starting abroad and actual outcomes after returning home. However, in a university, a student should plan how to tie the outcomes of studying abroad to his/her leaning after returning home. Evaluation utilizing rubrics often accompanies by the student survey and the data analysis. There are organizations which support such works and improve the quality of institutional research in the United States.